HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月経言説と生理用品の商品化 : 研究レビューを踏まえた問題提起
Author(s)	孫, 詩彧; 祁, 暁航; 張, 思銘
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 143, 17-35
Issue Date	2023-12-22
DOI	10.14943/b.edu.143.17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91012
Type	bulletin (article)
File Information	05-1882-1669-143.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第143号　2023年12月

月経言説と生理用品の商品化

―研究レビューを踏まえた問題提起―

孫　詩　彧*・祁　暁　航**・張　思　銘***

【要旨】 本稿の目的は，生理用品のベーシックインカムを提唱する前段階として，研究レビューで月経と生理用品に関する議論の到達点と課題を明らかにすることである。具体的に，月経に関する言説を整理した結果，宗教・神話の文脈において月経が誇張して語られる一方，現実生活で月経をタブーとみなす言説・規範が強く，月経教育の必要性と重要性が見えてきた。そして経血処置の材料と方法を歴史的にみると，量産の生理用品を利用することで現代の月経者はかつてより自由に行動できるようになったものの，月経処置の方法があまり大きく変わらない。月経者が自分の経験・ニーズを自由に共有することもまだできていない。その大きな原因として，生理用品が「商品」として普及してきたことが指摘された。この商品化により月経処置の経済的コストが個人に押し付けられ，月経にまつわる多くの課題が隠蔽され，結果的に月経処置の自己責任が強化されてしまう。本稿は以上を踏まえ，生理用品支給の意義を検討した。
【キーワード】生理用品　月経　社会史　月経教育　商品化

1. 研究背景と目的

様々な生理用品が広く販売されて月経の処置も何十年前より簡便になった現在，なぜ生理用品の利用について検討しないといけないか。本稿は，月経と生理用品に関する研究の到達点と残されている課題を明らかにするものである。これは今後，「生理用品のベーシックインカム」[1]を提唱する前段階の作業として位置付けている。

月経[2]は，性成熟してから子宮内膜が周期的に剥離・脱落する際に生じる出血であり，一種の生理現象である。田中（2019）の試算によると，現代の月経者[3]の生涯月経回数は，明治時

---

[1] 「ベーシックインカム」は本来，最低限所得補償の一種で，すべての国民に一律の金額を支給する基本生活保障制度のことである。本稿では「すべての月経者に，月経処置に必要最低限の生理用品を支給する」意味を表すためにこの概念を使用する。

[2] 月経は，「生理」「アレ」「女性の日」など様々な名称で呼ばれるが，本稿ではその正式な医学用語である「月経」を使う。

[3] トランスジェンダーや原発性無月経，初経前・閉経後などを考えると，月経を経験している人とが全員女性であるとは限らない，またすべての女性が月経を経験するわけでもない。近年英語圏の研究では「menstruator」（Rachel & Jessica 2020など）を使っている。本稿もこれにしたがって「月経者」で月経を経験する人を表す。

* 国際日本文化研究センター　助教
** 北海道大学大学院教育学院博士後期課程　生涯学習論講座
*** 北海道大学大学院教育学研究院　教育社会論講座　学術研究員・専門研究員
DOI：10.14943/b.edu.143.17

代の約9倍である[4]。一方，戦時性無月経など，非常時に月経の周期に乱れが起こることもあるが，細川（2021）の調査によると，現代では月経の周期は25歳ころに一番長くなり，45歳にかけて平均的に約3日間短くなることが分かった。個人差はあるが，月経はおおよそ28日間の周期[5]で起こり，3－7日間続くことが一般的である。現代の月経者は，かつてよりも安定した周期で月経を迎えている。この周期の安定性に加えてこれまで以上に月経を多くの回数で経験している現代人にとって，月経処置が重要な問題である。

では，月経の処置とはどういう営みだろう。月経は出血を伴う生理現象として捉えられているが，血が流れるだけではない。前掲細川（2021）の調査では，日本女性の7割に月経痛を感じ，8割に月経前症候群（PMS）[6]に自覚症状がある。月経による生理現象（出血・痛み・精神/身体的症状）は様々で，広義的にそれらの処置をすべて「月経の処置」とみなす場合，鎮痛剤や気分回復・栄養補充のための嗜好品，カイロなども生理用品として，月経の処置に必要であると考えられる。さらに，生理用防水シート，経血用洗剤など，経血による汚れの処置も挙げられる。これら経血の「二次的処置」を行うためのものも生理用品として位置付けられる。

この認識を踏まえたうえ，本稿は身体から流れてくる経血の処置そのものを一次的な処置として捉え，これにフォーカスして展開する。理由は主に以下の3点である。まず，出血は月経として一番普遍的に認識されている現象である。そして，この出血が一定の周期で起こり，経血を処置するために必ず定期的に処置活動や消費活動が行われる。さらに，月経に関する言説は経血を中心に構築されているからである。

ここでは，経血の処置を取り巻くテーマは大きく二つに分けられる。一つは月経に関する「不潔」や「恥」などの言説があるなか，性教育では月経およびその処置に関する知識を如何なるものとして教わっているか，もう一つは自分に適切な月経処置用品を手に入れ，使えるかどうか，である。二つのテーマに関してそれぞれ，第2章と第3章で整理する。

以上の整理を通して，月経をめぐる様々な言説は月経を普通の生理現象以上の何かに構築しており，性教育もこうした言説の影響を受けていることが分かる。また，現代ではナプキンやタンポン，月経カップ，月経ショーツなど，様々な生理用品が開発・販売されており，一見月経処置の選択肢が増えて処置自体も簡便になったことが明らかになる。「日本のどこへ行っても，スーパー，コンビニ，ドラッグストアの棚に必ず並んでいるので，突然月経がはじまったとしても不自由しない。…日本は，世界一の生理用品先進国ともいえる」（田中2019：3）。それでも，「モノがある」イコール「モノを手に入れられる」「モノを自由に使える」ではない。第4章では生理用品が商品として普及されてきたことに潜む課題を考察する。これを踏まえ，最低限の生理用品をベーシックインカムの形で支給されることにより，月経者が生

---

[4] 田中（2019：62）の試算では，明治時代の月経者は現代の月経者より初経が2年遅く，閉経は2年早い。これに加えて子どもの数を5人とした場合，「授乳性無月経」の期間も考慮して生涯月経回数は50回程度である。これに対して現代の初経年齢は12歳，閉経年齢は51で子ども2人を産む場合，それぞれ1年間母乳で育てて月経継続年数は約35年間で1年に13回経験して生涯月経回数は455回となる。

[5] 25日から38日間が正常月経周期とされている。

[6] 月経前症候群（PMS）とは，月経前の3-10日間続き精神的あるいは身体的症状で，月経開始とともに軽快しない消失するものである。原因は女性ホルモンの変動が関わっていると考えられる。症状は情緒不安定，抑うつ，不安，睡眠障害，腹痛，頭痛，むくみなどが挙げられる。

理用品を手に入れられて自由に使えるよう,「現物給付などの形で，生理用品を必要とする人の手元に届ける営み」の意義を検討する。

本稿の執筆に関して，第2章は祁，第3章は張が担当するものであり，それ以外の部分は孫が執筆したものである。

2. 月経に関する言説

第2章では，月経にまつわる社会的背景と言説を，宗教・神話の影響，現実生活における「沈黙」，月経教育という3つの視点から探究する。具体的にはまず，宗教・神話が月経をいかに語り，月経に対する社会的認識の形成に加担しているかを整理する。月経者が社会的に否定・差別・排除を受けるような月経のスティグマ化を検討する。このスティグマ化と絡み合い，月経に関すること自体が公で自由に語られずになる月経タブーも観察される。このタブーが月経者にどのような影響を与えるかを考察し，そこから月経教育や月経アクティビズムの重要性と可能性について論じる。最後に，開かれた対話が月経に対する肯定的な認識を促進し，月経者の健康と社会進歩にどのように寄与するかを検討する。

(1) 月経のスティグマ化：物語が作り出す「月経」

月経や経血は「ケガレ」「タブー」とされることが多い。人類社会は技術的にも医学的にも進歩したが，「月経」や「経血」はまだ公に話しにくいものであり，一部の地域やコミュニティでは，月経者は制約を受ける。「月経」の困難や制約の根源を探るには，宗教教義や神話を見る必要がある。この節では，世界の宗教や文化での月経物語[7]や規制をレビューし，それらが月経者のアイデンティティに与える影響を分析する。

宗教や信仰での物語では，月経者の月経は否定的で消極的なものとされることが多い。例えば，ヒンドゥー教では，月経者は「浄化」されるまで日常生活に戻れない（Garg 2015）。ヘブライ語聖書のレビ記では，月経者は不浄とされ，儀式に参加できず，男性は接触を避けるべきだと書かれている。多くの聖書解説者は，これらを月経者（女性）への神の罰や呪いとみなしている。日本でも，月経時に神社の参拝を禁じられ，月経小屋に閉じ込められることが戦後まで残っていた。宗教の規則は長く月経者に影響を与えてきた。それらは月経者の身体や心理を否定し，生活に制約をかけてきた。

しかし一方で，ギリシア神話[8]と日本神話[9]など，月経を神聖なものとする神話が存在する。民族文化においても肯定的に捉えられる場合がある。例として，アフリカのドゴン族では，月経者は強い力を持つ象徴とされており，インド文化では初潮は神聖なものとして祝福されている。これらは月経に対する認識や態度が多様であることを示している。しかし，これらが月経者の生活や自己認識に必ずしも良い影響を及ぼすとは限らず，一部の月経者は自分の

---

[7] 月経物語とは，月経や月経者に対する社会的な意味付けや解釈を表す物語であり，宗教や神話だけでなく，民間伝承や芸術作品，メディアなどにも見られる。本章では，宗教・神話や民族文化を中心とする。

[8] ギリシア神話では，狩猟と貞潔の女神アルテミスは，自分の信者である女性たちにも月経を与えて，彼女たちを清らかに保っていた。アルテミスは月経を神聖なものとして扱っていたと考えられる。

[9] 日本神話では，月経は天照大御神の血を受け継ぐ者の象徴であると捉えるものがある。

月経を誇りに思うかもしれないが，現代社会ではこれらが受け入れられているかが疑問である。実際には，これらは否定的な物語や規制と衝突し，月経者は葛藤や混乱を抱えることも少ない。肯定的であろうと否定的であろうと，月経に特別な意味や規範を押し付けること自体が問題であると言えよう。

宗教によって課される制約は，月経に対するスティグマの文化的な源泉であると言える。しかし，その影響は日常生活にとどまらず，Cohen（2020）はGoffman（1963）のスティグマ理論[10]に基づいて，月経がスティグマとして持つ3つの特徴を分析している。第一に，月経の儀式や規則は経血が嫌われることを暗示する。第二に，この嫌悪は個人の欠陥に転嫁され，経血や月経用品を晒すことは「汚染」とされて避けられる（Lee 1994）。第三に，経血は月経者のアイデンティティを示すものであり，初潮を迎えた女の子は「大人になった」と言われ，行動に制限がある（Lee & Sasser-Coen 1996a）。月経は男性の身体と異なり，「規制化」される必要がある。

「ケガレ」という意識は月経を不浄とし，差別し抑圧するために作られたものだ[11]と指摘されている。この意識は変化してきたが，近現代社会でも残っていると考えられる。例えば，神社や寺院に入れなかったり，家族や友人と距離を置かなければならなかったり，仕事や学校で不利益を受けたりする月経者もいる。これらは「ケガレ」意識が月経者の生活やアイデンティティに与える影響を示している。

(2) 月経タブー：現実生活における影響と抵抗

身体的なものから心理的なものまで，月経とそれにまつわる全面的なスティグマ化は，月経者の生活に不便をもたらし，精神的なストレスを与え，個人の成長を妨げる隠れた支障となっている。この節では，月経のスティグマ化が月経者をどう支配し，影響するかを検討する。また，社会的規範への抵抗として，月経体験を公開して話すことの意義や可能性について考察する。

まず，多くの文化で行われる月経初潮の思春期開始儀式[12]は，月経者のアイデンティティを認めるが，一部は月経者の身体や心理に抑圧や支配をする。Paige（1973）によれば，性別役割が区別され，男性の団結度が高い社会で，月経タブーは強い。これは，性別役割の固定観念，月経者の生殖能力への支配や規制，その指標としての初潮を反映している。また，思春期開始儀式の後，「沈黙」[13]が中心となる「月経マナー」を守るように教えられる。月経について話

---

[10] Goffman, E.（1963）によると，スティグマ化理論における三つのカテゴリは，第一に「身体的醜態」（火傷，傷跡，奇形など），第二に「個人的性格の汚れ」（犯罪性，依存症など），第三に周縁化された集団に関連する「部族」的なアイデンティティや社会的マーカー（例えば性別，人種，性的指向，国籍）である。

[11] 成清弘和（2003）『女性と穢れの歴史』塙書房，97頁

[12] 思春期通過儀式には月経祝いや新月会や生理会などは，月経を祝うためのものがある。世界中のさまざまな文化やコミュニティでは初潮を祝う伝統があり，北米のアパッチ族やオジブワ族やフーパ族や南太平洋地域や日本やアフリカやインドのウリシ族などはこの伝統を今でも続けている。月経祝いでは女の子を着飾ることや，家族や友人などによる祝福が行われることがあり，女の子の飲食を制限したり，隔離したりする儀式もある。

[13] 本稿では「沈黙」を，月経について話すことが社会的に受け入れられない状態として捉える。月経者は月経に関する自分の体験や感情を他人に伝えることができず，自己管理や隠蔽を強いられる。このような沈黙は，月経に対するタブーや恥感を作り出し，月経者の生活やアイデンティティに悪影響を与える。

すことはタブーであり（Lee & Sasser-Coen 1996a），沈黙を破ると否定的な感情が伴う（Lee & Sasser-Coen 1996b）。そのため，直接的な表現ではなく婉曲表現を使うことがある。多くのコミュニティでは，「月経」，「月経期間」，「生理」といった，生物学的な記述を避け，生物学的機能について議論することもタブー（Cauterucci 2016）とされている。さらに，月経者は月経周期について言及したり議論したりするとき，否定的なメッセージにさらされることが多く，それが否定的なフィードバックにつながったり，個人的な悩みや苦痛として捉えられ，公開して話すことに消極的になったりする。

前述した月経のスティグマ化の検討から，月経に対する否定的な認識は，月経者の身体を否定的に構成し，「月経恥」[14]を作り出す社会的解釈の産物であることが明らかになった。社会的規範が「秘密」とし，自己監視と制御で隠すことが要求され，「恥」は秘密と隠蔽で強化される。社会文化では，月経は否定的に扱われ，生理用品のリマインダーや連想でさえ回避行動を引き起こす（Roberts et al. 2002）。否定的な感情は嘲笑の対象とし，自己意識を低下させる（Fahs 2016）。これは社会的規範と同じく，自己監視で目に見えなくすることで起こり，社会が月経に対する社会的統制（Field＆Wood 2017）や隠蔽と排除するプロセスを表す。このように，沈黙することは，「月経恥」が生じて維持される方法の一つだと言えるだろう。この「言葉にできない」状態は，月経者が苦痛を黙って耐え，親密な関係圏で秘密裏に話し合うことを制限され，つながりを築く能力を奪っている。しかし一方で，話題を提起することはタブーを破る効果的な方法である。症状や不快感，感情の変化について話し合うことは，月経者たちがつながりを強め，コミュニティを形成し，文化的規範に抵抗するのに役立つからである。

以上から，月経タブーは月経者の生活とアイデンティティに影響する社会的現象だと示された。月経タブーは抑圧や支配，隠蔽や排除，恥や否定といった側面を持ち，自己表現や自己肯定，自己実現を妨げる。しかし，月経タブーは社会的解釈や文化的慣習の産物であり，不変ではない。月経体験を公開して話すことは，月経者の生活とアイデンティティを向上させ，社会的規範の変化につながると考えられる。

(3) 月経教育：社会的タブーに挑む

前文では，月経のスティグマ化が月経者の日常生活や自己認識に悪影響を及ぼすことが論じてきた。月経状態は，実際的なものであれ象徴的なものであれ，月経者に対する否定的な態度や自己評価を引き起こす。月経のスティグマ化に挑戦し，月経を客観的な視点で再認識することは，月経者の幸福感や社会的地位にプラスの影響を与える（Ingrid 2020）。しかし，否定的な物語は月経の「恥」に抵抗する上で新たな問題を引き起こす可能性がある。

月経の経験について語ることは，家父長制的規範への抵抗として，月経のタブーを破るアクティヴィズム（行動主義）の一形態とみなされる（Maureen C 2020）。しかし，月経についての議論は，個人的な体験の語りや生物学的な性差に限定されがちであり（Lee & Sasser-Coen 1996b），月経のタブーや恥感を助長する社会文化的要因についての綿密な探求はしばしば欠けている。一方で，月経をめぐる否定的な物語（痛み，情緒化など）に陥ることが多く，月経に対する消極な認識や，身体に対する否定的な文化的解釈をさらに強める可能性もみら

---

[14] 月経恥とは，月経にまつわる偏見や差別によって，月経者自身が自分の月経を否定的に見るようになり，月経を恥ずかしく感じるようになる状態である。

れる。

月経にまつわるタブーは，生物学的・医学的要因よりもむしろ社会文化的要因に由来していることがわかる。このようなタブーを打破するためには，月経と月経者に対する肯定的な認識と尊敬の念を高めるために，様々な側面からの教育と議論が必要である。月経に対する月経者の戸惑いや自己嫌悪を和らげることを，月経に関する教育プログラムの強化に結びつけることが想定される。しかし，月経教育に関する研究（高橋2013，原ら2021など）から，多くの課題が残っていることがわかった。その一つが，小学校の中学年で初経教育が行われたものの，その後の学習段階では月経に特化した内容がほとんどなく，学校では充分に指導がなされていないという状況である。また，月経教育の担当者が家庭では主に母親が担当し，学校では担任を主とし，月経のメカニズムとセルフケアに焦点が当てられている。しかし，生物学的・医学的なレベルでの理解を深めるだけでは十分ではない。月経と月経者に対する社会的認識の見直しを促す開かれた対話を推奨することで，月経者の月経恥をなくすことがさらに重要である。

月経は月経者の身体や心理に影響を及ぼすだけでなく，教育や就労，健康や権利など，さまざまな社会的問題に影響されている。月経をめぐる社会的な認識や態度を変えることは，月経者のエンパワーメントやジェンダー平等につながると考えられる。このような状況において，月経に対する社会の認識を是正し，公に月経の話題を提起し，性別平等や尊重を提唱すること，そして生理用品に関する問題に取り組むことは，月経のタブーを打破し，月経者の健康を改善し，社会の進歩を促進するための重要な一歩となるであろう。

本章では，月経に対する社会的認識が月経者の生活とアイデンティティにどのような影響を与えるかを分析し，月経教育と月経アクティビズムの重要性と可能性について論じてきた。月経にまつわる社会的・文化的なタブーは，依然として月経者の生活とアイデンティティに影響を及ぼしており，月経はしばしば「ケガレ」「タブー」「恥」として扱われる。そのため，月経者は月経体験を隠したり，沈黙したりすることが求められる。これらの問題に対処するためには，月経に関する肯定的な認識を普及させるための月経教育と開かれた対話が重要な手段であることを結論として強調したい。

3. 経血処置の歴史

月経を取り巻く社会的背景を踏まえたうえ，本章は物理的に経血を処置する方法について，歴史的にみる生理用品の変化を中心に整理する。具体的には，「明治以前」，「明治～戦後」，「使い捨てナプキン普及以降」の三つの時間帯に分けて検討する。時代とともに材料，生産方式の進化をてがかりに，日本の経験を据えながら，国際的な視点から経血処置の変遷をまとめる。

前章では，月経に対する社会的認知が月経者の生活とアイデンティティにどのような影響を与えるかを分析し，月経教育や月経アクティビズムの重要性と可能性について論じた。月経はしばしば「不潔」「タブー」「恥」として扱われ，月経者が自分の月経体験やニーズを語ることが抑制されてきた。これは，自分に適した生理用品の入手を難しくする可能性がある。一方，生理用品のあり方自体が，月経に関する言説の形成に加担している（塩月1995）。生理

用品というモノの変化は人々の身体感覚の変化を引き起こし，意識または言説の変化を促していく。例えば，洗濯機の普及により，下着もそれまでより頻繁に取り換えられるようになった（上野1989）。この清潔意識の変化は衛生に関する言説の成立を裏付けている。

したがって本章では，これまで経血の処置に使われるモノの変遷を整理することで，月経に関する言説と実践は歴史的・社会的・文化的な文脈において捉える。これは現代の月経者が直面する課題を明らかにするための作業になる。

以下の表1は歴史の流れに沿い，日本と海外において，当時最新の経血処置方法，または当時使用された材料と会社の動向を巡る変遷について整理したものである。現在までの経血処置の方法は大きく分けてナプキン式（外陰部にあてて経血を吸収するもの）とタンポン式（膣内に挿入して経血を回収するもの）の2種類がある。

表1　経血処置の変遷

海外		年代／時期	日本	
経血処置方法：ナプキン式	材料／会社の動向	明治以前～1868年	経血処置方法：タンポン式	材料／会社の動向
○欧米 ・処置なし ・手作りの布パッド／雑巾（rags）を股の間に挟む ・植物に座る ○アフリカ 月経小屋で植物に座る	○欧米 ・経血を直接服に流す ・ぼろ服 ・ワインで調理された野生のロケット ○アフリカ 仏炎苞		・平安時代以降，布製の「月経帯」が出現	○縄文時代 植物の葉や繊維（麻など） ○飛鳥時代 麻布や葛布 ○平安時代 貴族は絹，庶民は服類の端切れ ○江戸時代 粗末な紙や綿
経血処置方法：タンポン式／ナプキン式	材料／会社の動向	明治～戦後	経血処置方法：タンポン式＋ナプキン式	材料／会社の動向
○欧米 手作り月経布＝menstrual rags	フランネルや織物	1868年～	・脱脂綿を膣に詰め，上から月経帯で固定	○明治時代 脱脂綿（上流階級）
○アメリカ 使い捨てナプキン発売	Cellulos＝セルロース／コーテックス（Kotex）社	1918年		○大正・昭和 ・脱脂綿と月経帯の商品化が開始 ・脱脂綿：「月経球」「ニシタンポン」等 ・月経帯：「フレンド月経帯」「月経帯メトロン」
○アメリカ 「タンパックス（Tampax）」タンポン発売	パール（Pearl）社	1933年		

○欧米 手作りの月経布／使い捨てナプキン	○アメリカ 続々と新商品を開発し，各メーカーが競い合う	1937 年	タンポン式	戦時： 戦争による原料不足で処置方法は明治以前に逆戻り
		1938 年		桜ケ岡研究所（元エーザイ株式会社）：「さんぽん」タンポンの第一号
		1951 年	タンポン式＋ナプキン式	戦後： 脱脂綿の配給制解除，月経帯が再販売
経血処置方法： タンポン式／ナプキン式	材料／会社の動向	使い捨てナプキン普及以降	経血処置方法： タンポン式／ナプキン式	材料／会社の動向
○アメリカ 使い捨てナプキン販売拡大		1961 年～		アンネ社誕生：アンネナプキン発売
○韓国 使い捨てナプキン発売		1971 年		
		1975 年		ユニ・チャーム社タンポンの製造販売開始：タンポン「チャームタンポン a」発売
○中国 使い捨てナプキン発売		1982 年	化学合成ポリマーなど表面吸収材の技術が成熟。	ライオン，大王製紙，資生堂，P＆G も生産開始，新商品の開発と競争が白熱化

（1）明治以前

明治以前，世界は産業化されておらず，日本もヨーロッパも基本的には手元にある材料で，手作りで経血を処置していた。また，このような原始的な処置方法は現代のアフリカ社会でも依然として観察される。日本では，各年代に入手できる材料をそのまま膣内に詰め，手作りのタンポン式で経血を処置していた。縄文時代では，大麻などの植物の葉や繊維，大化改新以降は，麻布や葛布などの服類の端切れが経血処置に使われていた。平安時代に，貴族は絹，一般庶民は，服類の端切れと「月帯（けがれのぬの）」を当てて，経血を処置したと考えられる。江戸時代には，粗末な紙に加えて綿を膣に詰めたり当てたりした上で，綿製の月経帯で押さえていたと考えられる（田中 2013）。

一方，ヨーロッパ諸国においては，経血を処置するモノも手作りであったと考えられる。月経者は通常，服の中に出血し，ほとんどが服に血がついただけであり，布やパッドを使うのは出血量が多い人だけであったという指摘がある（S. Read 2013）。その後の時代には，雑巾（rags）を足の間に挟んで使用し[15]，洗って乾かして再利用していたことがわかっている（Vostral SL. 2008）。また，当時も女性の治療法として，ワインで調理された野生のロケッ

[15] 「on the rag＝雑巾の上」という俗語で月経を表すことがある。

ト[16]の上に座り，リネンの布（pannus lineus）をロケットの間に挟むような方法もあった（H. King 1998）。これは通常の月経のために行われることではなく，治療法として行われるものであったが，通常の習慣も示唆されている。

しかし，このような植物に座る経血処置法は，アフリカで現代社会まで続けていた。新本（2018）のパプアニューギニアでの現地調査によると，現在50代後半から80代の女性は，過去の経血処置として，土間式の月経小屋のなかで，下半身には何も着けずに仏炎苞[17]の上に座っていた。その後，現在40代から60代の女性たちは，家屋の隅に布を敷いて座るようになった。さらに，40代以下の世代はナプキンが流入したほか，当て布をパンツに挟む慣行も広まった（新本 2018，2019）。

（2）明治から戦後直前まで

明治時代以降，世界的に産業化が急速に進んできた。日本と欧米諸国では，布類で手作りのもので経血を処置しながら，女性の衛生観念の普及に伴い，衛生的な経血処置法をより求められるようになった。このようなニーズに応え，経血処置のモノが商品化されるようになった。

日本では，明治維新に伴い，女性の衛生教育が重要視されるようになった。その中，タンポン式の経血処置は，衛生面や安全性への懸念から，批判が相次いた。膣内に挿入しなく，外陰部に脱脂綿を当てる方法，いわゆる現在のナプキン式のものが進められるようになった。しかし，当時，脱脂綿は高価なもので，一般庶民は布や紙を外陰部に当て，或いはタンポンを手作りして手製月経帯で固定した方法で経血を処置をしていた（小野ら1983，女たちのリズム編集グループ1982）。大正時代から，昭和時代に入ると，「フレンド月経帯」と「月経球」などの製品が量産されるようになった。更に，1938年には，現在の形に近いタンポンの第一号，「さんぽん」が発売された（小野 2006）。それにより，明治末期から月経帯の商品化が始まり，昭和初期には各メーカーが競い合うようになった。

しかし，戦争が始まると，脱脂綿は軍隊の需要が優先され，明治以前のように紙や綿を詰めるような手作りのタンポン式の処置法が復活した（田中 2013，川村 1994）。戦後，1951年に脱脂綿の配給制が解除されてから，「黒いゴム引きパンツ」で脱脂綿やカット綿を押えるという方法が，経血処置法の主流だった（天野 1992）。

欧米においては，フランネルや織物で作られた手作りの月経布（menstrual rags）を股の間に挟む方法が主流だった。その後，衛生観念の普及に伴い，女性の衛生ニーズを満たす「衛生市場」が生まれた（J. Delaney et al. 1988）。最初の月経カップ，ゴムパンツ，リスターのタオル[18]を含む経血処置の製品が開発されたが当時に月経にまつわるタブーにより，販売が困難だった（GL. Hufnagel 2012，SL. Vostral 2008）。第一次世界大戦中にアメリカの従軍看護師たちは布製の材料より，セルロース（cellulos）はより吸血力が優れていたことに気づいた。そ

16　ロケット（Rocket）：キャベツ科の植物であり，ヨーロッパでは古くから種子から油をとるために栽培されていた。

17　仏炎苞（ぶつえんほう＝spathe）：ヤシ科植物の実を包むように成長する羽状の葉である。

18　最初の月経カップは，アルミニウムまたは硬質ゴム製であった。また，ゴムパンツが文字通りブルマまたはゴムで裏打ちされた下着である。リスターのタオルとはマキシパッドの前身，脱脂綿とともに使う黒木綿の生理帯である。

れをヒントに，1918年にコーテックス（Kotex）は初めてセルロース製生理用ナプキンを販売した。1921年までに，Kotexは初めて大量販売に成功した生理用ナプキンとなった（J.Delaney et al. 1988）。現代の使い捨てタンポン「Tampax」は1933年に発売された。商品化に伴い，販売の困難の原因である人々の月経にまつわるタブーを克服するため，各会社は宣伝キャンペーンを行い始めた（VL. Bullough 1985）。ヨーロッパでは，手作りの月経布は1940年代までまだ使用されていたが，1930年代のアメリカでは，生理用品の新商品の開発で，各メーカーが競い合っていた。また，アメリカにおいては，第二次世界大戦中の工場の雇用主は，月経者が毎月の出血する際も働き続けるために，生理用品を使うように推奨し，生理用ナプキンも段々と主流になっていた（SL. Vostral 2008）。このように，戦争は日本女性を苦労された一方，アメリカにおいて，生理用ナプキンの普及を促し，女性に家庭外活動の選択肢を与えた。

(3) 使い捨てナプキンの普及とその以降の発展

戦後の復興と共に，生理用品の商品化がさらに進展した。日本は欧米諸国に遅れをとりながら，生理用ナプキンの生産と商品化が急速に進んでいた。また，欧米諸国では，各種の生理用品の開発と商品化が進む中，第二波フェミニズムと共に，生理用ナプキンなどの更なる普及が見られた。また，東アジアでも，生理用品の商品化も進みはじめた。

戦後の日本の生理用品の発展において，画期的なのはアンネナプキンの登場である（田中2006，2013；小野 1992，2006）。アンネ社の開発と広報を通して，一気に生理用品の進化と月経にまつわる意識の変化に拍車をかけた。1961年に，坂井泰子がアンネ社を成立し，使い捨てナプキンを商品化した。15年の間に，アンネナプキンの利用者は日本の月経者に占める割合が2％から50％まで伸びていた（田中2006）。

70年代に入ると，生理用ナプキンは表面材が吸収力の高い不織布に進化し，現在に至るまでの技術に固まり，化学合成ポリマーでできている。現在，少子化の進展に伴い，生理用品市場は縮小している。そこで，夜用や日用のサイズの展開，羽の有無などといったナプキンの付加価値を発売することで，国内市場での収益拡大を図っている。またタンポン，月経カップ，月経ディスクなどの用品は商品化されたが，膣内に挿入されることへの抵抗感により，利用率が未だに低いのままである。また，手作りの布ナプキンを愛用しているが，作りづらい面が見られる（小野 2009）。

また，欧米諸国でも，商品開発に開花し続けている。例えば，最初の月経カップは硬質ゴム製だったが，現在はシリコン製が主流となっている（GL. Hufnagel 2012）。更に，戦後の第二波フェミニズム運動により，女性たちが自分の体を心地よく受け入れるような意識が高まり，生理用ナプキンの販売が大成功になった。また，生理を隠したり恥ずかしがったりすることに反発し，自由出血（free bleeding）を支持する人も現れた（SL. Vostral 2008）。2000年の時点では，女性の80%以上がタンポンを使用しており，パッドとパンティライナー（panty liners）がそれに次ぐ（W. Nicole 2014）。

東アジアでは，韓国で1971年，中国で1982年に使い捨てナプキンが発売になった（申ら2006，澎湃新闻2022）。それにより，使い捨てナプキンの材料と製造ラインは，日本に続けて海外も統一するようになり，また，経血処置用品の主流になった。また，今後は使い捨て製品の環境への影響に対する懸念が高まっている中，各国において手作りの布ナプキンなど，再利用可能な生理用品の普及が進んでいる。

以上，経血処置の歴史を通して，生理用品の材料や生産方式の進化が見えてきた。これにより月経者は，より自由に行動できるようになった。また，衛生観念の普及に伴い，清潔な商品を求めるニーズが生み出され，生理用品市場はさらに繁栄した。いまでは生理用品の生産ラインが世界中に統一され，より多くの月経者が容易に生理用品を入手できるようになった。ところが，経血処置の材料と方法の歴史的な流れにおいて，いくつかの課題が見えてきた。

まず，歴史的にみて経血処置の方法（ナプキン式とタンポン式）があまり大きく変わっていない。日本ではアンネナプキン登場してから現在まで，様々な生理用品が登場し，マーケティングの宣伝で月経をまつわる「ケガレ」や「恥」の意識も弱まってきたが，いまだにユーザーである月経者がそれぞれのニーズを自由に語れる環境だと言えない。また，近現代の技術・材料の発展で天然素材があまり使われなくなってきたことも，使い捨ての生理用品が増えたことも，環境保全の観点で指摘を受けるようになってきた。

第2章を踏まえ本章の整理では，経血処置の歴史が長く，処置のあり方と絡み合う形で月経の言説も変わることが分かった。そして処置の材料と方法の変化において，生理用品の商品化が特に重要である。次章はここにフォーカスして議論を深めていく。

4. 商品としての生理用品

前章の整理では，月経帯やタンポン，ナプキンなどが生産・販売されてきたことにより，月経の間は何もできない足枷から，「女性たちを解放したのである」（小野 2000：51）ことが見えてきた。生理用品の如何により，月経の捉え方ならびに月経者の境遇が変わる。天野・桜井（1992：66-67）は使い捨て可能なナプキンの価値を，次のように評価している。一つは生理時のうっとうしさ，様々なタブー，行動の規制から月経者を大きく解放した。もう一つは，生理を「秘すべき，恥ずべき，忌むべき」ものとする通念から解放の第一歩となった。田中（2020：107）では，労働環境の改善と1960年代にナプキンの登場で，月経中も普段通り働ける女性が増え，生理休暇の形骸化が進んだと述べている。こうして近代以降に普及してきた生理用品は，「解放」をキーワードに肯定されてきたと同時に，それまで月経によって月経者の社会進出がいかに制限されてきていることも浮き彫りになる。

こうした生理用品の生産・販売の功績自体を否定しないが，これまで整理した通り，月経をめぐる十分な性教育が行われていない中，経血の処置だけが生理用品を購入することで簡便になると，月経の処置がますます月経者の自己責任になり，問題化しにくくなる恐れがある。本章では生理用品が「商品」として普及することを切り口に，そこに潜む課題を検討したい。

いうまでもなく，今でも砂や木の皮，布などを使って経血の処置をしている人々が世界中に少なからずいる。これは一見，原始的で非衛生的であるが，経血処置の材料を簡単に手に入れられる意味で，処置の自由を獲得している。一方，主流となる生理用品のほとんどは購入する以外に自分で材料を調達して作成することが難しい。手作り可能で環境にやさしいと宣伝される布ナプキンですら，材料として不可欠な透湿防水布を買わないといけない。このように生理用品が商品として生産・販売される時点から，誰でも簡単に入手できるものではなくなり，それを得て使うために何かのコストがかかる。こうした商品に依存するほど，商品の有無と如何なる商品があるかによって，月経者の経血処置は左右される。この意味で近

年話題になった「生理の貧困」[19]は，生理用品が商品として販売されていることによる「二次被害」の結果として位置付けられるのではないか。

具体的に，生理用品が商品として普及することは，次の3点において課題を抱えている。

第１は，月経処置の経済的コストを月経者に押し付けることである。アンネ社広告資料のキャッチコピー「お茶代をひと月たった1回，節約しませんか」（田中 2019：291）が典型的に示したよう，月経処置のコストは大したものではないことと，自分で節約さえしてナプキンを購入すれば「ゼイタクにいたわれ」ることが強調されている。一方，生理の貧困に関する調査では，まったく違う事実が示されている。イギリスの場合，10人に1人生理用品を買うことができず，約19％の月経者が経済的コストの原因で適切ではない生理用品で我慢せざるを得ないことが分かった（Plan International UK 2018，Overview & Scrutiny 2019）。同じくPlan Internationalの日本調査では，生理用品の購入や入手をためらい，購入できないことを経験する割合が35.9％である（Plan International Japan 2021）。高収入の国において経済的な制限が1-3割程度報告されるほか，月経に関する規範の強さなども挙げられているのに対して，低収入・中等収入の国では経済的資源・生理用品そのものの資源の不足が一番大きな課題であるとBarrington et al.（2021）とHennegan et al.（2019）が大量の生理用品研究をレビューして指摘した。

実際の経済的コストについて，日本の試算では経血処置用品だけでも月経者の経済的負担は一生涯で50万円近くかかり，そこに鎮痛剤など広義的な生理用品代を加えるとさらに高くなるだろう。こうした経済的コストはすべて生涯平均年収が男性の70％しかない月経者（その多くは女性）に背負わせている。さらに，生理用品が消費税軽減税率の対象外である国や地域では，生理用品を商品として販売・流通させるため，何十パーセンターの消費税も月経者が負担している（Jennifer 2020）。

したがって第2に，生理用品がどこでも売っていることと，いざ月経が来たときその処置ができることとは別の話であるにもかかわらず，この間の分断を，生理用品が商品として普及したことで見えなくなった。もちろん前述した経済的の問題で購入できないことが一つの原因であるが，ほかの原因として権力の問題や空間の設計などがあげられる。例えばホームレスを支援するNPO団体の一部では，生理用品の無償提供を行っている。ところが生理用品は基本的に有償で購入しないと得られない世間一般の認識において，無償提供の生理用品は一つの「恩恵」であり，経血処置に困るホームレスにとって大切な「資源」である。その希少性によりNPO団体は生理用品を管理するが，月経者は担当者にリクエストしないと必要なものを得られない。すると月経者と管理者の間に資源をめぐる権力のアンバランス関係が生じてしまい，無償提供があっても結果的に月経者は自由に生理用品を使えないことが頻繁に起こると，Shailini（2020）のインタビューから明らかになった。似たような関係性は障害を持つ月経者のニーズが十分満たされない場合や，監禁される月経者の月経処置においてもみられる（Tomi-Ann 2020，Linda & Beth 2020）。

また，多様な生理用品はあるものの，それらすべての使用に適するトイレ空間が十分でき

---

[19] 「生理の貧困」とは一般的に，経済的な理由などから生理処置用品を購入することが困難な状態を指す。これに対してアメリカ医学女性協会（AMWA）によるPeriod Povertyの定義がさらに広く「月経処置の衛生用品や教育，衛生施設，そして廃棄方法に対して十分な資源を得られない状態」である。

ていない。小野（1987）の調査は，荷物置台やサニタリーボックスが設置されない公衆トイレは月経者を困らせ，トイレの利用自体が妨げられると指摘した。トイレはし尿の処置以外に，経血の処置の場という重要な役割を担っているにもかかわらず，トイレ研究と掲げる研究書に月経に留意したものはほとんどない。使い捨ての生理用品は環境保全の面で非難される一方，月経カップのような洗って何度も利用できる生理用品は，その衛生管理上，取り出してから溜まった血を捨て，洗ってから再度膣に入れるプロセスを完成するため，トイレの個室に洗面台が必要である。ところが様々な生理用品の利用シーンに合わせたトイレ空間の設計の見直しが，いまだになされていないようである。

第3は，生理用品の広告による月経言説の構築と月経処置における自己責任の強化である。生理用品は商品である以上，その売上が重視される。ところが販売戦略の根底に，恥・ケガレの意識をより強く構築し，月経が見えないように隠す作業の創出と，月経処置の自己責任を強調するポリシーがある（Ela & Breanne2020）。例えば生理用品の広告やブックレットは，月経に関する知識を月経者に教えているが，それが必ずしも適切であるとは限らない。Mindy et al.（2002）は1932年から1997年の間，Kimberly-Clark，Personal Products，Procter and Gambleなどの生理用品メーカーが発行したブックレット28冊を分析した結果，この60何年の間に月経をめぐる恥の意識を強化し，おおやけに語らせないことに変わりがない。

CMなどの広告では販売戦略の文脈がより鮮明に見える。まずは婉曲表現を用い，月経に関する議論を平和に治まる。ビジュアルではBlue Blood（青い血）で月経を表し，赤い血を直接使わないことが典型的である。この青い血が性教育の妨げになることも懸念されている。日本ではアンネナプキンの広告方針に「血という文字を使用しない」と決められている（渡 1963）。出血の多寡といった月経の周期の描写も避けて「日と量」で言い回しをしている（田中 2019：161）。次に経血が漏れることを恥ずかしい粗相として描写し，月経者は経血が漏れないように自己管理しないといけいないことを強調する。前掲小野（1987）の調査では，公衆トイレに生理用品の自動販売機の設置に反対した理由は「女性として自分の身体には常に関心を持つべき」であり，反対者が12.8％である。これはチリ紙の自販機設置の反対者数（4.3％）をはるかに超えている。恥・ケガレの意識が生理用品の広告によって強化され，なお月経者の自己責任として管理を求められた。ここで広告は正しい管理の仕方として，特定の生理用品（自社商品）を提案し，購入を促す。こうして生理用品の広告は，商品を購入することだけで月経の処置ができると強調し，月経を隠す責任を作り出して個人に押し付けた（Przybylo & Fahs 2018）。

一方，近年ではフェミニズムの影響で月経のエンパワーメントを目的とする新しい広告がなされてきたが，Ela & Breanne（2020）はそれらを「peppy performance」（元気な演出）と「fit bleeding」（適切な出血）という二つのモデルにまとめた。前者のほうはスポーツのシーンなどを積極的に取り入れ，女性が元気いっぱいで出血を楽しむ様子，後者は出血を経験しても女性はなお強くいられる様子を強調して月経を表している。これらは月経によって月経者の行動や自分の経験を語ることを抑制しない意味で，従来の生理用品広告を乗り越えていると評価できる反面，異なる月経者が異なる時期に経験しうる月経の多様性を過小視する恐れがある。

さらに，広告による月経と生理用品をめぐる言説の構築で，次の限界も考えられる。特定のブランドや商品，特に高価なものを使うことで自分の階層性をアピールする可能性があ

る[20]。また，いまだ広告で登場する人物はストレートの異性愛女性が多く，月経者＝女性のイメージが強化されている。これによって生理用品の売り場自体がジェンダーかされる空間となり，利用のハードルが高くなる。

いずれにしても以上で整理を通して，生理用品が普及してきた裏側に，月経の処置に関してまだたくさんの課題が十分検討されず，解決にも遠いまま放置されている。終章では，これまでの議論を踏まえたうえ，なぜいま，生理用品の支給について議論するか，その意義と論点を提示していきたい。

5. なぜ生理用品のベーシックインカムが必要か

以上の整理によると，生理用品をベーシックインカムの形で必要な人に提供することは，少なくとも次の点において有意義である。一つ目は，改めて月経処置の問題を提起し，この問題を一般化させることで性教育の効果を果たしながら，性成熟を経験している人々の通過儀礼として位置付けられる。月経処置が簡便になることで，これまで論じられないまま放置される課題も多くあるなか，とりわけ青少年がこうした課題に直面するとき戸惑うであろう。生理用品を支給する作業を通して，月経にまつわる経験を共有し，ニーズを語るハードルが下がり，利用者が自分のニーズを言い出す環境作り自体が，性教育の重要な一環である。

二つ目は前述の語りの環境作りを通して，月経が神の血筋を受け継ぐ証拠でも避けられるべきケガレでもない，ただの生理的現象であることを改めて主張することで，月経に必要以上にかけられる幻想を取り除き，月経を通して月経者/女性を特別扱いする言説を乗り越えられる。生理用品の広告をめぐる議論で指摘されたように，月経や生理用品に関して月経者たちが自分の経験や不満，気づいた問題を自らならないと，消費主義的な宣伝に流されてしまうだけである。生理用品の支給を通してこれまで様々な神話を付け加えられた月経の見直しと，月経への理解を深めることができる。

三つ目は，鎮痛剤など広義的な生理用品も含めて支給ができるようになると，月経者と非月経者の間にあるケイパビリティの差を埋めて，SDGsに寄与し，女性の社会進出の実現などを通して社会的に機会の平等の実現につながる。

これは四つ目とも関連して，誰かに代わって月経を体験することができなくても，生理用品の使用体験，開発工程には，月経者と非月経者の区別なく誰でも参画できるものである。この意味で生理用品のベーシックインカムは，互いの理解を促すことにもなる。

こうした生理用品を必要とする人の手元に届ける実践は，とりわけコロナ禍において生理の貧困問題が注目を集められてきた後，より広い範囲で行われるようになった。日本ではビジネスとしてトイレの個室に生理用品提供の設備を設置し，広告を流す収入と引き換えに生理用品の無償提供をする試みがなされている[21]。中国では「互助ボックス」をトイレに設置し，女性同士の助け合いが推奨されている。韓国では行政が主体となる支援施策で，生理用品と

---

[20] 例えばP&G社の生理用ナプキン「ウィスパー コスモ吸収」は独自の新素材を採用したプレミアムラインである。日本では製造設備等の事情で2018年に販売終了になったが，海外では今も販売されている。現在Amazonでカナダ製のものは１枚（多い日・昼夜用・羽根つき）が400円前後で販売されている。

[21] オイテル株式会社　https://www.oitr.jp 閲覧日：2023.6.14

引き換えるバウチャーポイントが，月13,000ウォン（約1,500円）が支給される[22]。このような実践はいずれも，生理用品の有無と誰でも生理用品を自由に使って月経処置できる状態との分断に気づき，そこの問題解決に志向する営みである。

ところが，こうした実践を支える理論的な検討がまだ不十分であり，実施する際にも多くの課題に直面している。例えば日本は企業や大学，団体寄付などの形で提供された生理用品は，応急処置用のものか，生理の貧困を緩和するためかの位置づけが明確ではない。中国の「互助ボックス」はいまだに，月経経験を女性の経験として特化し，月経処置のコストを女性にだけ背負わせる限界を乗り越えていない。韓国の行政支援は貧困の緩和を主な目的で，一般的に得られる支援ではない。これによって支援を受ける側のスティグマ化が懸念されている。このほかに，生理用品を現物給付で提供するときの衛生面，恥の意識の課題もたくさんあげられる。実際本稿を執筆するとき，東アジアをフィールドにした月経と生理用品の研究が英語圏と比べてはるかに少ないことも分かった。

したがって今後の研究では，生理用品を必要な人の手に届ける営みを考え，いくつかの課題を検討する必要がある。まずは適切な生理用品が選べられる状態，すなわち生理用品が十分月経者のニーズに満たせるように開発されているか，自分に適切なものを選ぶ知識の普及と，生理用品に必要以上の社会的規範がかけられていないかである。例えば東アジアの生理用品を提供する実践のなかで使い捨てナプキンが最も一般的に選ばれるが，タンポン使用者にとって不便である。ところがタンポンに関して今でも貞操観念の影響で忌避される側面がある。それぞれの生理用品はそれぞれの長所と短所があるなか，理想として期待されるのはすべての短所をなくす「よりよい」生理用品ではなく，多様で，入手可能な，個々人のニーズに満たせるものである。

次は生理用品をいかに手に入れられるかの問題である。税金や配布するときの権力問題などを考慮し，トイレに備え付けることが理想として考えられるが，その場合のコスト負担など，さらなる議論が必要である。これに合わせて適切な空間で月経の処置ができるかどうか，生理用品を提供するための空間作りも考慮しないといけない。このほか，災害時に備えて生理用品の備蓄，災害が起きた時の提供なども議論する必要がある。

以上の課題について議論を深めていく際に手がかりとしているのは「生理用品のベーシックインカム」である。本稿はこれを提唱するまでの前段階にある作業であり，ベーシックインカム自体についてもまだこれから議論を深める必要がある。なお今後は，東アジアの様々な実践に着目しながら，事例研究も付け加えたい。この議論はジェンダー意識の再考や月経者の福祉向上に寄与するだけではなく，性教育や地域研究へのインパクトも期待できる。

謝辞

本稿はacademistより実施するクラウドファンディング「生理用品を必要な人に提供できる包括的な社会を目指す！」の研究の一部です。この研究プロジェクトは，実学誌株式会社様をはじめ，たくさんのサポーターの支援により研究費を集め，成立したものです。ここにて感謝を申し上げます。

---

[22] 여성청소년 생리대 바우처 지원（韓国女性家族部女性青少年生理用ナプキンバウチャーサポート）https://www.mogef.go.kr/sp/yth/sp_yth_f017.do 閲覧日：2023.6.14

参考文献

Barrington D.J. ,Robinson H.J. ,Wilson E., Hennegan J. (2021) *Experiences of menstruation in high income countries: A systematic review, qualitative evidence synthesis and comparison to low- and middle-income countries*, PLoS One

Cohen, I. (2020) *Menstruation and Religion: Developing a Critical Menstrual Studies Approach* Bobel C et.editors『The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies』閲覧日：2023.8.10

Ela P., Breanne F. (2020) *Empowered Bleeders and Cranky Menstruators: Menstrual Positivity and the "Liberated" Era of New Menstrual Product Advertisements*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p375-394

Fahs, B. (2016) *Out for Blood: Essays on Menstruation and Resistance* Albany NY:SUNY Press.

Field, M., and J. Wood. (2017) *Menstrual Politics: Resisting the Concealment Imperative through RUMPS.* Paper presented to the Biennial Conference of the Society for Menstrual Cycle Research, Kennesaw State, Georgia, June.

GL. Hufnagel (2012) *A history of women's menstruation from ancient Greece to the twenty-first century: Psychological, social, medical, religious, and educational issues* Edwin Mellen Press

Garg, S., and T. Anand. (2015) *Menstruation related myths in India: strategies for combating it.* J Family Med Prim Care 4(2), p184-6

Helen King (1998) *Hippocrates' Woman: Reading the Female Body in Ancient Greece* Routledge

Hennegan J., Shannon AK., Rubli J., Schwab KJ., Melendez-Torres G.J. (2019) *Women's and girls' experiences of menstruation in low- and middle-income countries: A systematic review and qualitative metasynthesis*, PLoS Med

Israel, S. L. (1967). *Normal puberty and adolescence.* Annalsof theNew YorkAcademy of Science, 142, p773-778

J. Delaney, MJ. Lupton, E. Toth (1988) *The Curse: A Cultural History of Menstruation* Illinois: University of Illinois Press

Jennifer WW. (2020) *U.S. Policymaking to Address Menstruation: Advancing an Equity Agenda*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p539-549

Johnston-Robledo, I., and J. C. Chrisler. (2020) *The Menstrual Mark: Menstruation as Social Stigma* Bobel C et.editors『The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies』閲覧日：2023.8.10

Lee, J. (1994) *Menarche and the (hetero) sexualization of the female body.* Gender and Society 8(3), p343-362

Lee, J., and J. Sasser-Coen. (1996a) "Blood stories: Menarche and the politics of the female body in contemporary U.S. society." New York: Routledge.

Lee, J., and J. Sasser-Coen. (1996b) *Memories of Menarche: Older Women Remember their First Period.* Journal of Aging Studies 10(2), p83-101

Linda S., Beth G. (2020) *The Human Rights of Women and Girls with Disabilities: Sterilization and Other Coercive Responses to Menstruation*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p71-99

McHugh, M. C. (2020) *Menstrual Shame: Exploring the Role of 'Menstrual Moaning'* Bobel C et.editors『The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies』閲覧日：2023.8.10

Mindy J. E., Joan C., Jennifer A. G., Ingrid JR., (2002) *Education and Advertising: A Content Analysis of Commercially Produced Booklets about Menstruation*, The Journal of Early Adolescence 22(4), p455-474

Overview & Scrutiny (2019) *Tackling Period Poverty and Raising Period Awareness*, https://www.birmingham.gov.uk/downloads/file/14394/tackling_period_poverty_and_raising_period_awareness_inquiry 閲覧日：2023.6.14

Paige, K. E. (1973) *Beyond the raging hormone: Women learn to sing the menstrual blues.* Psychology Today, p41-46

Period Poverty（アメリカ医学女性協会）https://www.amwa-doc.org/period-poverty 閲覧日：2023.6.14

Plan International Japan (2021)「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査結果」https://www.plan-international.jp/activity/pdf/0413_Plan_International_Ver.03_01.pdf 閲覧日：2023.6.14

Plan International UK (2018) *Break the barriers: Girls' experiences of menstruation in the UK*, https://plan-uk.org/file/plan-uk-break-the-barriers-report-032018pdf/download?token=Fs-HYP3v 閲覧日：2023.6.14

Przybylo E., Fahs B. (2018) *Feels and flows: on the realness of menstrual pain and cripping menstrual chronicity*, Feminist Formations30 (1), p206-299

Rachel B.L. and Jessica L.BT. (2020) *Addressing Menstruation in the Workplace: The Menstrual Leave Debate*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p539-549

Roberts, T.-A., J. L. Goldenberg, C. Power, and T. Pyszczynski. (2002) *'Feminine Protection': The Effects of Menstruation on Attitudes towards Women.* Psychology of Women Quarterly 26(2), p131-39

SL. Vostral (2008) *Under wraps: A history of menstrual hygiene technology* Latham, editor. Lexington Books

Sara Read (2013) *Menstruation and the Female Body in Early Modern England* Basingstoke: Palgrave

Shailini V. (2020) *The Realities of Period Poverty: How Homelessness Shapes Women's Lived Experiences of Menstruation*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p31-47

Swenson, I., and B. Havens. (1987) *Menarche and menstruation: a review of the literature.* J Community Health Nurs 4(4), p199-210

Tomi-Ann R. (2020) *Bleeding in Jail: Objectification, Self-Objectification, and Menstrual Injustice*; Bobel C, Winkler IT, Fahs B, et al. *The Palgrave Handbook of Critical Menstruation Studies*, Singapore: Palgrave Macmillan, p53-68

VL. Bullough (1985) *Merchandising the Sanitary Napkin: Lillian Gilbreth's 1927 Survey*『Signs: Journal of Women in Culture and Society』10(3), p615-27

W. Nicole (2014) *A question for women's health: chemicals in feminine hygiene products and personal lubricants*『Environmental health perspectives. National Institute of Environmental Health Science』Vol.122, pA70-5

天野正子，桜井厚（1992）「『モノと女』の戦後史：身体性・家庭性・社会性を軸に」有信堂高文社

馬場まみ（2015）「近代における月経観と女性の身体認識」『女性の人権問題（旧研究第4部）研究紀要』第20号，pp.259-276

細川モモ（2021）『生理で知っておくべきこと：自分の体を守る正しいデータを持てなかった女性たちへ』日経BP

川村邦光（1994）『オトメの身体：女の近代とセクシュアリティ』紀伊國屋書店

女たちのリズム編集グループ【編】（1982）『女たちのリズム：月経・からだからのメッセージ』現代書館

小野清美，山田節子（1983）「明治末期より昭和初期にかけての生理用品について—明治の女性の語る月経にまつわる話」『助産婦雑誌』37（10），pp.819-827

小野清美（1987）「女子用公衆トイレの実態調査」日本トイレ協会編『トイレの研究:快適環境を求めて総合的に科学する』地域交流出版 pp.249－257

小野清美（1992）『アンネナプキンの社会史』JICC出版局

小野清美（2006）『生理用品の45年の軌跡』ふくろう出版

小野千佐子（2009）「布ナプキンを通じた月経観の変容に関する研究：『存在する月経』への選択肢を求めて」『同志社政策科学研究』11巻2号　pp.149-162

澎湃新闻（2022）『一片姨妈巾托起400亿大市场，中国卫生巾产业30年大变迁』 https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_16232536 閲覧日：2023.9.6

新本万里子（2018）「生理用品の受容によるケガレ観の変容：パプアニューギニア・アベラム社会における月経処置法の変遷から」『文化人類学』83巻1号 pp.25-45

新本万里子（2019）「パプアニューギニアにおける月経衛生対処に関わる教育と女子生徒たちの実践—月経のケガレと羞恥心をめぐって」『国際開発研究』第28巻第2号 pp.35-49

申正和,鄭明姫,朴美愛,安允瓊（2006）「女性用生理用品の使用実態及び認知度に関する韓・日の比較」『人間-生活環境系シンポジウム報告集』30 pp.197-200
塩月亮子（1995）「沖縄における生理用品の変遷 ―モノ・身体・意識の関係性を探る研究にむけて」『民族學研究』59（4）, pp.464-469
田中ひかる（2006）『月経をアンネと呼んだ頃：生理用ナプキンはこうして生まれた』ユック舎
田中ひかる（2013）『生理用品の社会史：タブーから一大ビジネスへ』ミネルヴァ書房
田中ひかる（2019）『生理用品の社会史』角川ソフィア文庫
田中ひかる（2020）『月経と犯罪：“生理”はどう語られてきたか』平凡社
上野千鶴子（1989）『スカートの下の劇場：ひとはどうしてパソティにこだわるのか』東京：河出書房新社
渡紀彦（1963）『アンネ課長』日本事務能率協会

Menstrual Discourse and the Commercialization of Sanitary Products: Issues Raised Based on Research Review

SUN Shiyu, QI Xiaohang, ZHANG Siming

Key Words

Sanitary Products, Menstruation, Social History, Menstruation Education, Commercialization

Abstract

This paper is a review of research on menstruation and sanitary products that identifies the research reaches and issues. This is positioned as a preliminary work to propose a "basic income for sanitary products". Concretely, the review of discourses on menstruation revealed that while menstruation is exaggerated in religions and myths, there are strong discourses and norms that consider menstruation taboo in real life, and the necessity and importance of menstrual education is evident. And looking at the materials and methods of menstrual treatment historically, although the use of mass-producted sanitary products have allowed modern menstruators to act more freely than in the past, the methods of menstrual treatment have not changed much. Morover, menstruators have not yet been able to freely share their experiences and needs. One of the major reasons for this was pointed out as the widespread use of sanitary products as a 'commodity'. This commercialization imposes the economic cost of menstrual treatment on individuals, conceals many issues related to menstruation, and consequently reinforces self-responsibility for menstrual treatment. Considering the above, this paper examines the significance of the supply of sanitary products.